



| | |
|-------------|--|
| Data | 2023-56 |
| 監督・脚本・製作: | イエジー・スコ リモフスキ |
| 脚本・製作: | エヴァ・ピアスコフス カ |
| 出演: | サンドラ・ジマルスカ/ロレ ンツォ・ズルゾロ/イザベ ル・ユペール/マテウシュ・ コシチュキェビチ |

👁️👁️ みどころ

EO (イーオー) って一体ナニ? それは、愁いを帯びた瞳と溢れる好奇心を持った灰色の1頭のロバの名前。6頭のロバが交代で主役のEO役を演じ、EOを取り巻く人間たちはあくまで脇役だ。

そう聞けば、ロバを主人公にした『バルタザールどこへ行く』(66年)を思い出すが、同作にインスパイアされたイエジー・スコリモフスキ監督は現代版“ロバの寓話”を作ることに挑戦!

ロバはサーカス団に縁があるが、本作のそれは冒頭の物語だけ。サーカス団は良かったが、その解散からEOの波乱万丈の物語が展開していくので、それをハラハラドキドキしながら楽しみたい。

私は子供時代に読み親しんださまざまな童話から多くのものを学んだが、あなたはEOの生きざまから何を学ぶ?



■□このポーランド人監督に注目! 本作の主役はロバ! □■

2023年5月9日にはロシア最大の行事である「戦勝記念日」の式典が開催されたが、今年はその規模の“小ささ”が注目を集め、さまざまな話題を呼んだ。そんなロシアの最大の敵とされたナチスドイツが突如ポーランドへの侵攻を開始したのが1939年9月1日だが、イエジー・スコリモフスキ監督がポーランドで生まれたのは、その直前の1938年5月5日だ。そんなポーランド人の老監督の名前がクレジットされた映画は20本を超えるそうだが、私が知っているのは『アンナと過ごした4日間』(08年)、『シネマ23』(80頁)だけだ。もっとも、彼は脚本家としても、俳優としても、さらには画家としても活躍しているそうだからすごい。

そんなスコリモフスキ監督の7年ぶりの新作が本作だが、タイトルの『EO』って一体ナ

ニ？それは何とロバの名前だ。そして、本作の主役はその EO（イーオー）だから、本作は一体何の物語？

■□■ロバを主人公にした“現代の寓話”を製作した動機は？■□■

本作のパンフレットには「PRODUCTION NOTE&INTERVIEW」がある。その最初の文章は次の通りだ。

7年間監督業を離れていたイエジー・スコリモフスキが、現代の寓話というすばらしい形の映画で戻ってきた。ポーランドとイタリアで撮影されたこの映画の主人公はロバ。パートナーのカサンドラとともにサーカスで幸せに暮らしていた1頭のロバが、サーカスを離れることを余儀なくされる姿を描く。ロベール・ブレッソンの映画にインスパイアされたスコリモフスキは、サルディーニヤ種のロバを主人公とするこの現代版ロバ物語を撮ることで、ブレッソンに敬意を表している。

そこで言う「ブレッソンの映画」とは『バルタザールどこへ行く』（66年）（『シネマ47』未掲載）のことだ。同作の評論で、私は「ロバの知能がどの程度なのか全然知らないが、ストーリー中サーカスに連れて行かれたバルタザールが（3ケタ）×（2ケタ）のかけ算の回答をしているシーンを見てビックリ！これはヤラセ？それとも・・・？また、本作ではバルタザールと少女マリーとの恋人同士のような関係にビックリ！」と書いたが、それに比べて本作の主人公 EO の知能は？また、EO と人間との付き合い方は？

■□■主役の選定はオーディション？いやいや・・・■□■

映画界では、主役の選定にあたってオーディションが行われることが多い。その最終決定権者は監督だが、実は本作では主役の選定にあたってオーディションは行われておらず、監督が惚れ込んだロバのタコをはじめ、本作では6頭のロバが EO 役として本編中に登場しているらしい。人間なら6人の俳優が1人の主人公を演じることなど不可能だが、ロバの顔や体となると、それが可能らしい。

しかして、「愁いを帯びた瞳とあふれる好奇心を持つ灰色のロバ」という主役の条件を満たすロバとして、スコリモフスキ監督のお眼鏡にかなったのが、本作のキャストとして表示されている、タコ、オラ、マリエッタ、エットーレ、ロッコ、メラの6頭だ。しかし、例えば獣医さんなら、この6頭のロバの相違点を見抜けるかもしれないが、一般の人間はどれも同じロバに見えるはず。パンフレットの「CAST PROFILE」には、本作のストーリー展開における6頭のロバの役割分担が解説されているので、これは必読！？

■□■最初の所属はサーカス団！そこは良かったが・・・■□■

ロバといえば、一般的に荷物運びの代名詞のように考えられている。同じ日に観た『帰れない山』（22年）でも、高い山の上に山小屋を建てるための材料を運搬する手段はもっぱらロバだった。しかし、『バルタザールどこへ行く』で観たように、ロバの知能が（3ケタ）×（2ケタ）の掛け算ができるほど優れているのなら、サーカスでのお仕事は最適だ。

しかして、本作冒頭は、心優しきパフォーマーの女性・カサンドラ（サンドラ・ジマルスカ）のパートナーとしてサーカス団で生活している EO の姿に注目！カサンドラはトコトン EO に優しくしてくれていたが、他の団員は？さらに、サーカス団の経営が立ち行かなくなると、真っ先に売り飛ばされてしまう資産は？

本作の主人公はロバの EO だからセリフがないのは当たり前だが、その脇役（？）として登場するカサンドラたち人間も、ほとんどセリフを喋らないまま物語が進行していく。しかし、本作冒頭は概ねそんな物語だ。そして、ある日、EO がサーカス団から連れ出されてしまうと・・・。

■□徹底的にロバの視線から！脇役の人間たちは？■□

はじめて“幻の巨匠”と呼ばれるイエジー・スコリモフスキ監督作品の『アンナと過ごした4日間』を観た私は、映画へのアプローチの違いにビックリするとともに、“ストーリー”と紙一重の（ストーリーとしか言いようのない？）、アンナの部屋に入り込んだ主人公の視線からトコトン「アンナと過ごした4日間」が描かれていることにビックリ。モノの見方が人によって、また視線によって違うことは、弁護士生活50年近くになる私が強く実感していることだが、映画作りにおいてスコリモフスキ監督ほど、1つの視線を徹底させる監督はいないはずだ。『アンナと過ごした4日間』では徹底的にストーリー男（？）の視線から、そして、本作では徹底的にロバの EO の視線からストーリーを構築しているので、それに注目！

他方、本作の脇役として登場する人間たちは、①サーカス団のパフォーマーであるカサンドラの他、②伯爵夫人（イザベル・ユペール）や、③そのドラ息子（？）・ヴィトー（ロレンツォ・ズルブロ）、④EO を運ぶトラックの運転手で、非業の死を遂げる（？）マテオ（マテウシュ・コシチュキェヴィチ）等だ。これらの人間たちが主人公 EO の脇役として登場するストーリーは、突然、殺人事件が発生するなど、結構、波乱万丈のものになっている。その中で EO 自身も瀕死の重症を負ったり、傷が癒えると野生動物の収容施設で働かされたり、スコリモフスキ監督独特の面白い作りになっているから、そのつもりで、EO をめぐる善人、悪人たちが織りなすさまざまなストーリーを楽しみたい。

2023（令和5）年5月15日記